

「エルサレム、エルサレム」

ルカの福音書 13:31～35

はじめに

今回は「後の者が先になる」というタイトルで、終わりの日に起こる神のご計画の「型」としての視点でこれを読み解き、本来は先の者であるイスラエルが後になり、後の者である私たち教会が先になり、携拳と言う形で先に救われること、そしてイスラエルは大きな患難を経た後に救われるという神のご計画が表されていることを述べました。その大きな患難とは、「家の主人に追い出されるしもべ」の姿にたとえられていました。この「家の主人」とはヘブル語ではバアル・ハツバイト(בַּעַל הַבַּיִת)、またはヴァアル・ゼヴール(בַּעַל זְבוּר)すなわちベルゼブル(「家の主人がベルゼブルと呼ばれる (マタイ 10:25) 」)とも訳される言葉で、イスラエルの家ハツバイトであり神の住まいゼヴール (I列 8:13) であるエルサレムの神殿を奪い、これに乗っ取る偶像バアルのごとき存在である不法の者、滅びの子 (IIテサ 2:3)、獣とも呼ばれる反キリストを指しており、そしてこれが「立ち上がる」ことによって、それはすなわち「立ち上がる」クーム(קוּם)という言葉の本来の意味である「兄が弟を誘い出し襲いかかる (創 4:8)」というような欺き、裏切り、騙し討ちによってイスラエルの民はエルサレムを追われ、前回「狭き門」とイエシュアがたとえられたボツラの地へと追いやられる、という神のご計画について述べました。そしてそれは以下の結末、預言が成就するためのものであるとも述べました。

イザヤ書【新改訳 2017】

34:6 主の剣は血で満ち、脂肪で肥えている。子羊とやぎの血、雄羊の腎臓の脂肪で。主が**ボツラ**でいけにえを屠り、エドムの地で大虐殺をされるからだ。

63:1 「エドムから来るこの方はだれだろう。**ボツラ**から深紅の衣を着て来る方は。その装いには威光があり、大いなる力をもって進んで来る。」「わたしは正義をもって語り、救いをもたらす大いなる者。」

この時、主イエシュアは地上再臨され、後の者となった先の者イスラエルの残りの者に「**救いをもたらす大いなる者**」として来られ、彼らを苦しめたすべての敵に対する「**大虐殺をされる**」ことが預言されています。このようにしてイスラエルに対する主の救いの御業は成し遂げられるということを書きました。

これに続く今日の箇所もまたエルサレムにおける終わりの日の神のご計画について秘められたものとなっています。わたしたちの主はアブラハムの子孫であるイスラエルをお選びになっただけでなく、彼らの都エルサレムをもお選びになったのです。この事実を重んじることと神のご計画を知ることとは同義です。それでは今日も神のご計画の「型」預言書として聖書を読み解いてまいりましょう。

1. パリサイ人の偽り

ルカの福音書【新改訳 2017】

13:31 ちょうどそのとき、パリサイ人たちが何人が近寄って来て、イエスに言った。「ここから立ち去りなさい。ヘロデがあなたを殺そうとしています。」

前回取り上げた箇所冒頭に「イエスは町や村を通りながら教え、エルサレムへの旅を続けておられた。(ルカ 13:22)」とあったように、イエシュアはただまっすぐにエルサレムを目指しておられました(ルカ 9:51)。そんなイエシュアに対してパリサイ人たちがまるで助言をするかのようにこうささやきます「**ここから立ち去りなさい。ヘロデがあなたを殺そうとしています。**」しかしこれはエルサレムからイエシュアを引き離そうとするサタン誘惑です。なぜなら彼らのこの助言はまったくの偽りだったからです。以下は同じルカの福音書に記されたヘロデのイエシュアに対する思いを記した箇所です。

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:7 さて、領主ヘロデはこのすべての出来事を聞いて、ひどく当惑していた。ある人たちは、「ヨハネが死人の中からよみがえったのだ」と言い、

9:8 別の人たちは、「エリヤが現れたのだ」と言い、さらに別の人たちは、「昔の預言者の一人が生き返ったのだ」と言っていたからである。

9:9 ヘロデは言った。「ヨハネは私が首をはねた。このよううわさがあるこの人は、いったいだれなのだろうか。」**ヘロデはイエスに会ってみたいと思った。**

このように、ヘロデはイエシュアに対する殺意などまったく抱いてはおらず、それどころかイエシュアがどのような人物なのかを知りたいと思っていました。敵であるサタンは、このようにエルサレムとイエシュアを引き離そうとします。そのためにサタンの用いる手段は常にこの偽りです。これが「偽りの父(ヨハネ 8:44)」と呼ばれる所以です。イスラエルの民と同様に、このエルサレムという場所もまた神のご計画において重要な存在であることを、敵もよく理解しているようです。ですからサタンはこの街を何としても自分の支配下に置き、エルサレムを汚し、神に逆らわせようと画策します。以下の記述は「エルサレム」という名前が聖書で最初に使われた出来事です。

ヨシュア記【新改訳 2017】

10:3 **エルサレム**の王アドニ・ツエデクはヘブロン¹の王ホハム、ヤルムテの王ピルアム、ラキシユの王ヤフア、エグロンの王デビルに人を遣わして言った。

10:5 それでアモリ人の五人の王、すなわち、**エルサレム**の王、ヘブロン¹の王、ヤルムテの王、ラキシユの王、エグロンの王、彼らとその全陣営は集結し、上って行ってギブオン²に向かって陣を敷き、戦いを挑んだ。

10:7 ヨシュアはすべての戦う民たちとすべての勇士たちとともに、ギルガルから上って行った。

10:8 主はヨシュアに告げられた。「彼らを恐れてはならない。わたしが彼らをあなたの手に渡したからだ。あなたの前に立ちはだかる者は彼らの中に一人としていない。」

10:9 ヨシュアは夜通しギルガルから上って行って、突然彼らを襲った。

10:11 彼らがイスラエルの前から逃げて、ベテ・ホロンの下り坂にいたとき、主が天から彼らの上に、大きな石をアゼカに至るまで降らせられたので、彼らは死んだ。イスラエルの子らが剣で殺した者よりも、雹の石で死んだ者のほうが多かった。

ヨシュア率いるイスラエルに対して戦いを挑んでくる五人の王たち、その筆頭としての聖書で最初の「エルサレム」の名がここにありますが。そして主ご自身がこのエルサレムの支配者とその軍勢を滅ぼされたことが記されています。聖書に記録されているイスラエルの戦いにおいて、敵と対峙し得る力が民に十分あるにもかかわらず、このような形で主ご自身が力強い超自然的な介入によって直接敵を滅ぼされるというこのようなケースは非常に稀、というかこの一箇所のみです。さらにこの戦いで主は太陽と月の動きを止めるという宇宙の法則を捻じ曲げてまでイスラエルに勝利をもたらしておられ「このような日は、前にも後にもなかった（ヨシュア 10:14）」と記されています。ここに主がどれほどこのエルサレムという名、その存在に対する格別な思い入れ、情熱をお持ちで、そしてこれを支配し、神に逆らわせるような者に対する怒りの激しさがここに表されていると感じさせられます。そのようなエルサレムを敵であるサタンは奪い、全歴史を通じて執拗にこれを支配し、神に逆らわせようと仕掛けます。しかしイエシュアはこの敵を排除し、エルサレムを取り戻すことを預言してこう言われました。

2. 狐

ルカの福音書【新改訳 2017】

13:32 イエスは彼らに言われた。「行って、あの狐にこう言いなさい。『見なさい。わたしは今日と明日、悪霊どもを追い出し、癒やしを行い、三日目に働きを完了する。』」

イエシュアはヘロデのことを「あの狐」と呼んでいます。先ほど述べたように彼にイエシュアに対する殺意はありません。ここでこのヘロデのイエシュアに対する記述をさらに見てみましょう。

ルカの福音書【新改訳 2017】

23:8 ヘロデはイエスを見ると、非常に喜んだ。イエスのことを聞いていて、ずっと前から会いたいと思ひ、またイエスが行うしるしを何か見たいと望んでいたからである。

23:13 ピラトは、祭司長たちと議員たち、そして民衆を呼び集め、

23:14 こう言った。「おまえたちはこの人を、民衆を惑わす者として私のところに連れて来た。私がおまえたちの前で取り調べたところ、おまえたちが訴えているような罪は何も見つからなかった。

23:15 ヘロデも同様だった。私たちにこの人を送り返して来たのだから。見なさい。この人は死に値することを何もしていない。

このように、悪人のイメージが強いヘロデですが、意外にもヘロデはイエシュアを喜び、また罪のない方と認めた存在としても記されているのです（ちなみに幼子だった時のイエシュアを殺そうとしたヘロデ王（マタイ 2:1）とは親子ではあっても別人ですのでお間違えなく）。この点を踏まえた上で、イエシュアが

彼を「あの狐」と呼んだ意味を考えてみましょう。ヘブル語でこの「狐」のことをシューアール(לְשׂוּעַל)といますが、この初出箇所を見てください。

士師記【新改訳 2017】

15:4 それからサムソンは出て行って、ジャッカルを三百匹捕らえた。そして、たいまつを取り、尾と尾をつなぎ合わせて、二本の尾の間にそれぞれ一本のたいまつをくくり付けた。

15:5 彼はそのたいまつに火をつけ、それらのジャッカルをペリシテ人の麦畑の中に放し、束ねて積んである麦から、立ち穂、オリーブ畑に至るまで燃やした。



これは十二士師の一人、怪力で知られるサムソンが、イスラエルの敵であるペリシテ人に報復した出来事のうちの一つですが、ここに用いられた「ジャッカル」が聖書で最初のシューアール「狐」なのです。彼はこれを「三百匹」使ってペリシテ人の畑を焼き尽くしました。この「三百」という数は本来、創世記 5:22 にある「エノクは…三百年、神とともに歩み」という記述から、神とともに歩み、天に引き上げられる者という存在を指し示し、つまりこのシューアールには本来、忠実な神のしもべ、しかも敵を火で焼き尽くすような、あの預言者エリヤ（Ⅱ列 1:10）のような存在が指し示されているのです。さらにこのジャッカルは「二本の尾の間にそれぞれ一本のたいまつ」とあるように、二匹一体で用いられたことから、終わりの時代にエルサレムに現れる以下の存在が浮かび上がってきます。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

11:1 それから、杖のような測り竿が私に与えられて、こう告げられた。「立って、神の神殿と祭壇と、そこで礼拝している人々を測りなさい。」

11:2 神殿の外の庭はそのままにしておきなさい。それを測ってはいけません。それは異邦人に与えられているからだ。彼らは聖なる都を四十二か月の間、踏みじめることになる。

11:3 わたしがそれを許すので、わたしの二人の証人は、粗布をまとって千二百六十日間、預言する。」



11:4 彼らは、地を治める主の御前に立っている二本のオリーブの木、また二つの燭台である。

11:5 もしだれかが彼らに害を加えようとするなら、彼らの口から火が出て、敵を焼き尽くす。もしだれかが彼らに害を加えようとするなら、必ずこのように殺される。

11:6 この二人は、預言をしている期間、雨が降らないように天を閉じる権威を持っている。また、水を血に変える権威、さらに、思うままに何度でも、あらゆる災害で地を打つ権威を持っている。

このように、イエシュアはヘロデに「あの狐」と呼びかけながら、終わりの日に現れるこの「二人の証人」の働きを指し示しておられ、つまり「『見なさい。わたし「の二人の証人」は今日と明日、悪霊どもを追い」

出し、癒やしを行い、三日目に働きを完了する。」と言っておられるのです。ちなみにこの「三日目」とはイエシュアの復活を連想する日数でもあります、本来はこのように用いられました。

創世記【新改訳 2017】

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そして、わたしがあなたに告げる一つの山の上で、彼を全焼のささげ物として献げなさい。」

22:3 翌朝早く、アブラハムはろばに鞍をつけ、二人の若い者と一緒に息子イサクを連れて行った。アブラハムは全焼のささげ物のための薪を割った。こうして彼は、神がお告げになった場所へ向かって行った。

22:4 三日目に、アブラハムが目を上げると、遠くの方にその場所が見えた。

アブラハムとイサクが「三日目」に見たこの「モリヤ」の山は、やがてエルサレムの神殿が建つ場所です（Ⅱ歴代誌 3:1）。このように、イエシュアは終わりの日に「二人の証人」がエルサレムにおいてその働きを全うすることを預言しておられるのです。その結末について、イエシュアはさらに次のように預言されます。

3. 死と復活と昇天

ルカの福音書【新改訳 2017】

13:33 しかし、わたしは今日も明日も、その次の日も進んで行かなければならない。預言者がエルサレム以外のところで死ぬことはあり得ないのだ。』

13:34 エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。

いかなる者をも焼き尽くし、数々の奇蹟を行いながらエルサレムの住民に対して預言する「二人の証人」ですが、彼らはやがてイエシュアがここで預言されたとおりにこうなります。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

11:7 二人が証言を終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまう。

11:8 彼らの死体は大きな都の大通りにさらされる。その都は、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれ、そこで彼らの主も十字架にかけられたのである。

このように、「二人の証人」の死とイエシュアの十字架の死が重ねられて記されています。ですからイエシュアもまた同じように、ご自分がエルサレムで殺されることと、終わりの日の彼ら「二人の証人」の死を重ねて預言しておられるのです。そしてイエシュアがよみがえられたように、彼らもまたよみがえらされます。続いてこう預言されているとおりです。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

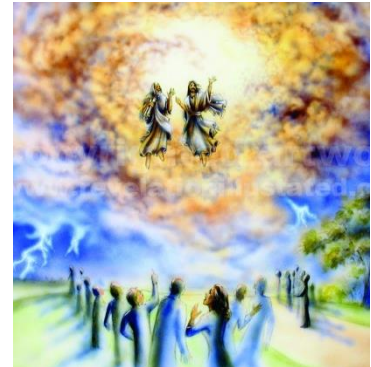
11:9 もろもろの民族、部族、言語、国民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体を眺めていて、その死体を墓に葬ることを許さない。

11:10 地に住む者たちは、彼らのことで喜び祝って、互いに贈り物を交わす。この二人の預言者たちが、地に住む者たちを苦しめたからである。

11:11 しかし、三日半の後、いのちの息が神から出て二人のうちに入り、彼らは自分たちの足で立った。見ていた者たちは大きな恐怖に襲われた。

11:12 二人は、天から大きな声が「ここに上れ」と言うのを聞いた。そして、彼らは雲に包まれて天に上った。彼らの敵たちはそれを見た。

11:13 そのとき、大きな地震が起こって、都の十分の一が倒れた。この地震のために七千人が死んだ。残った者たちは恐れを抱き、天の神に栄光を帰した。



「二人の証人」の死とよみがえり、そして昇天、さらに大地震、このように、彼らの働き、奇蹟はイエシュアの働きそのものと言えます。そしてこれらの奇蹟を目の当たりにした「もろもろの民族、部族、言語、国民に属する人々」そしてエルサレムの「都の…残った者たちは恐れを抱き、天の神に栄光を帰した」とあり、これによって大勢の人々が主に立ち返ることが預言されています。

このように終わりの日「底知れぬ所から上って来る獣」によって「霊的な理解ではソドムやエジプト」と呼ばれるほどにまでエルサレム（神殿）は墮落します。しかし「二人の証人」の働き、彼らの上に現わされた主の御業によってイスラエルの残りの者はイエシュア・ハマシアに向かって「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」と告白する者となるのです。逆説的にこう預言されているとおりです。

ルカの福音書【新改訳 2017】

13:35 見よ、おまえたちの家は見捨てられる。わたしはおまえたちに言う。おまえたちが『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』と言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。』

4. 恵みと嘆願

終わりの日に現れるこの「二人の証人」、彼らは一体誰なのでしょう。名前は記されてはいませんが、イスラエルをイエシュアに立ち返らせるという目的において彼らをこう呼ぶことができます。それは「恵み」の霊と「嘆願」の霊であると。

ゼカリヤ書【新改訳 2017】

12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。

「二人の証人」とはここに預言された「恵みと嘆願の霊」の具現化、実体化した存在であると言うことができます。I コリント 15:45 で使徒パウロがよみがえられたイエシュアを「いのちをあたえる御霊となられた」と書いていることともつながります。この「恵み(単)と嘆願(複)」はヘブル語の語源としてはどちらも同じヘーン(הון)となり、まさに二つで一つの霊なのです。最後にこの言葉の初出箇所も見てみましょう。

創世記【新改訳 2017】

- 6:1 さて、人が大地の面に増え始め、娘たちが彼らに生まれたとき、
- 6:5 主は、地上に人の悪が増大し、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になった。
- 6:6 それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。
- 6:7 そして主は言われた。「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜や這うもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造ったことを悔やむ。」
- 6:8 しかし、ノアは主の心になっていた。
- 6:9 これはノアの歴史である。ノアは正しい人で、彼の世代の中であって全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。

ノアは地上に悪が増大してもなお神とともに歩みました。そして自分の家族と多くの生き物たちを箱舟へと迎え入れ、主はこれらすべてを救われました。終わりの時代に「心になつて」神とともに歩む「恵みと嘆願の霊」を注がれるイスラエルの残りの者は、このノアのように、多くの異邦人を主に立ち返らせませす。そのために現れる預言者たち「二人の証人」、彼らのエルサレムにおける働きが、神のご計画が、ここでのイエシュアの御言葉には奥義として秘められており、イエシュアが再びこの地上に来られること、すなわち「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」というイスラエルの残りの者の声に答えて主イエシュアが地上再臨されること、そして主がお選びになった都エルサレムに帰って来られることがここには指し示されているのです。まさにこう記されているとおりです。

マルコの福音書【新改訳 2017】

- 11:9 そして、前を行く人たちも、後に続く人たちも叫んだ。「ホサナ。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。
- 11:10 祝福あれ、われらの父ダビデの、来たるべき国に。ホサナ、いと高き所に。」
- 11:11 こうしてイエスはエルサレムに着き、宮に入られた。

この御言葉も終わりの日に起こることを預言しています。「前を行く人たちも、後に続く人たちも」とあるように、先の者も後の者もともにこのように叫び、イエシュアはエルサレムに入って来られるのです。父よ、イエシュアの御名があがめられ、御国が来ますように、御心が天で行われるように、この地でも行われますように。アーメン